

米医 D・B・シモンズ (II)

——福沢諭吉の書簡よりみたるアメリカにおけるドクトル・シモンズ——

荒井保男

はじめに

私はさきに米医 D・B・シモンズ Duane B. Simmons が横浜の十全医院を舞台に、数々のすぐれた業績を残したことや福沢諭吉との親交について、本誌第三十三卷第一号^(一)において報告した。

しかし、明治十五年母国アメリカに帰国してからのシモンズの動静については、杳^{よう}として知るところがなかった。困り果てていた私は、「福沢諭吉とあれだけの親交のあったシモンズである。帰国後も両者の間に何らかのやりとりが

あったに違いない。ひょっとしたら諭吉宛の書簡の一つぐらい見つかるのではないか。」と、ある日、書簡集である福沢諭吉全集第十七卷^(三)、第十八卷^(二)を読んでみた。驚いたことに、アメリカ留学中の二子、一太郎、捨次郎宛の諭吉書簡の中にシモンズの名が屢々出てくるではないか。

小躍して私は諭吉全集所収の二子宛、及びシモンズ宛、ヨングハンス宛、福沢桃介宛の諭吉書簡のすべて読んでみた。読後、これから得られたものをつなぎあわせてゆくと、おぼろげながらもアメリカに於けるシモンズ像が浮んできた。

以下、福沢諭吉の書簡を通じて得られたアメリカにおける D・B・シモンズの像について、若干の考察を加えながら報

告してみたいと思う。

一 愛児二子の洋行

自ら前後二回洋行し、外遊の教育的価値をつぶさに知り尽くしていた福沢諭吉は、いつの日か自分の愛児を洋行させることが、年来の望みであった。

こんな話がある。

明治四年の年の暮、諭吉の愛児一太郎満八歳、捨次郎満六歳のときである。

横浜の豪商高島嘉右衛門から、横浜に洋学校を開設したので、諭吉みずから出て来て、洋学校の管理をしてくれないかという申し込みがあった。

諭吉はいつの日か子供を洋行させたいという願いが常に脳裏にあったから、それには金が欲しい、子供が成人するまでには金が欲しいと、誰彼となく平気で人にも話していた。

それを聞いて嘉右衛門が打診して来たのである。嘉右衛門が言うには「いまここであなたに月給をあげるといっても取りもしないだろうが、ここで五千円か一万円か、まとまった金をあなたにお渡しする。差し当り要らない金だから、どこかへそれをお預けになる。お子さんが成長して洋行留学する段になると、その金が利倍増長して立派に学資金になる。この案はいかがですか」というのであった。

諭吉は熟慮の末、この申出を結局は断ったのであるが、それには「眼前の子供を見て、その行く末を思い、また顧みて自分の身を思い、一進一退これを決断するには、ずいぶん心を悩した」という。ともかくわが子の外国留学という一事は諭吉多年の宿願であった。

幸にして諭吉の著訳書は時代の人々に喜び迎えられて、その売り上げによって家計に十分の余裕が生ずるようになって



図 1 洋行中の一太郎（右）と捨次郎

いた。一太郎を大学予備門（ここを卒業すれば東京大学へ進学できる）に入學させたものの、健康を害してしまい、大学予備門を断念、慶応義塾の普通課程を履修し、いよいよ念願の洋行の日が目前にやってきていた。

論吉の二子がアメリカ留学に出発したのは明治十六年六月十二日で、時に一太郎二十一歳、捨次郎十九歳であった（図1）。

幸いなことに、たまたま村井保固が帰国しており、村井が二子と同行して行を共にすることとなった。村井保固は愛媛県の人、明治十年六月慶応義塾入門、福沢の推薦によって森村組に入り、そのニューヨーク支店長として後年わが国貿易界に重きをなした人物である。論吉は船中の面倒を依頼して、後顧の憂なきよう万全を期したのである。

出発に際し、論吉は留学中の心得を巻紙に記し、二重の封筒に納めて、二子に与えたのであった。いよいよ二人が米國郵船オセアニック号に乗船すると論吉は、「餞二子洋行」と題して次のような七言絶句を作った。

努力太郎兼次郎 努力せよ太郎よまた次郎よ

雙々伸翼任高翔 双々翼を伸べて高く翔ぶに任す

一言猶是餞行意 一言猶ほ是れ行に餞するの意は

自國自身唯莫忘 自國と自身と唯だ忘る莫れ

アメリカに渡った二子は前述の村井保固に伴われて大陸を鉄道で横断

し、七月七日ニューヨーク着、新井領一郎の寓居に旅装を解いた。

その月末に二人はワシントンに行き、駐米公使の寺島宗則と書記官の鮫島武之助に面会した。諭吉は寺島・鮫島両氏に留学中の二子の教育監督を依頼しておいたからである。寺島は旧薩摩藩士で幕府時代は松木弘安と名乗っており、諭吉とともに遣欧使節に随行した蘭学者仲間で、諭吉の最も親しい友の一人であった。鮫島は慶応義塾における福沢門下生である。

寺島と鮫島の周旋で一太郎はオハヨ (Ohio) 州のオーバリン (Oberlin) スクールに行くこととなった。下宿先はニューヨーク氏宅である。

ところが教育監督を依頼した寺島は大使解任となり、帰国することになってしまった。^(四)そこで監督後見役をシモンズに托することとなった。ここにおいてシモンズが登場することとなるのである。

二 シモンズ登場

このころドクター・シモンズから一通の手紙が諭吉のもとに届いていた。それは二人の出発のときに持たせた諭吉のシモンズ宛の書簡、および二子から出した手紙が非常に延着したため、シモンズが二人をアメリカ到着の最初から世話することの出来なかったことを詫びた文面であった。

その辺の事情を十月二十日付のシモンズ宛の書簡は次のように伝えている。^(五)

「千八百八十三年十月二十日東京三田に於て。九月十五日の貴書を得て拜讀す。賤息共渡米の節に附したる私書、竝に子供より呈したる書狀、共に非常なる延着の由、誠に驚き入り候次第、小生に於て残念に存じ候。併し是は今更致方もこれ無きこととして、さて兩人を貴國へ差し遣わし候に付き、之を寺島公使へ托したるは、公使は君の知らるゝ如く小生の舊友、且又公使の書記官鮫島氏は、其少年の時、弊塾に居て、子供兩人は幼稚の時より氏に愛せられ、始

終親しくしたる者なれば、荊妻の考にも、寺島公使と鮫島氏へ頼み度との念願により斯くは處分したることなり。もとより亜米利加に行て、同國に小生の切友なる君の在るあり。たとひ特別に御依頼を煩はすなきも、一般に御添心を願ふは小生の心事にして、即ち子供へも書狀を附して之を呈したる由縁なり。

然る處、先便も貴書を辱ふし、又今回は教育の事につき懇切なる忠告を賜はり、誠に有難く、實は寺島公使竝に鮫島氏も解任歸國に付ては、爾後如何致すべきやと甚だ心配致し居り候折柄、今便の來翰、兩人教育の事に付き格別に御世話下さるべき旨を拜承致し候は、此上もなき幸なれば、何卒御引受け、入學教育のみならず、健康の事、品行の事、一切お差し圖願ひ奉り候。

兩人共先年中、東京大學へ暫く執行致したることあれども、大學の教授過度にして健康を害せんとする恐あり、殊に十三、四歳正に身體發達の時節に、畢生の患を讓成すは以ての外と存じ、斷然退學致し候事なり。……

兩人の内、兄の方は全く文才なきに非ざれども、數學の考に乏しきが故に、農學に従事せしめ、殊に其實際を學ばしめんと欲するなり。弟の方は何科にても一科學を學ばしめんと欲す（電氣學は如何と思へども、本人の好む所もあらんなれば、之を強ゆるに非ず）。

寺島公使竝に鮫島氏がラーバリンスクールを擇びたるは、第一、同處は田舎にて風俗質素、少年の品行と健康とを保つに宜しとの見込にして、第二、小生の家は君の知らるゝ如く甚だ富むに非ず、私費を以て二人を一時に外國へやり、年々の學費を送るは随分大儀につき、成るだけ費を少なくせんとするの見込ならん。此二ヶ條は小生の志願なれば、今後君の厚意に任せて御依托を願ふも、本人品行の事と其健康の事と、又毎年費用の事は、格別に御注意を奉願候。……

兩人留學の年限は、小生唯今の考にては四年或は五年を期す。かねて君の知らるゝ如く、日本少年の身體は之を米人に比して薄弱なるが如し。故に學問の速成を求めて健康を失はんより、寧ろ四、五年を費さんと欲するなり。過般

も兩人へ遣したる書狀に、數年の後汝等が歸國したる時に、半死半生の文人を見るよりも、筋骨逞しき不學者に逢はんこと、汝の父母の願ふ所、又國の爲に祈る所なり。と申しつかわしたり、小生の志願御洞察下されたく候。……………

右の如く申上、君の御引受を願ふたる上、尚今回子供の方へ申し遣わし候間、子供より御文通申し上げ候事ならん。其上にてヤーバリンを去るの手續等は宜しき様に御取計い下されたく願ひ奉り候。

福澤諭吉

諭吉はアメリカには親友シモンズが居りながらそれを無視して、ひとり寺島・鮫島兩氏にのみ頼ってしまったことに對し、しきりに詫びて、今後は二人の息子の健康、教育の管理をシモンズに一任したいと懇願しているが、親の子を思う心情がみちあふれていて、読む者の心を打つ。

一太郎は閑静な田舎町に寄寓したものの、この学校に農學も理工學の専門科もなかったので、しばらく英語の練習を積んでから、然るべき学校に移ることとした。

シモンズの指導であらう、一太郎は明治十七年一月、シモンズの住むニューヨーク州ポーキプシーに移り転校の準備をした。ポーキプシーは当時ニューヨークから汽車で二時間あまり離れた小さな町であった(圖2)。

その頃の諭吉の書簡に次のようなものがある。(明治十七年一月十六日付、一太郎、捨次郎宛)

「……………一太郎は農學の爲ミシガンへ抔ク話も、ニウトン博士より注意致し呉れ候よし。夫は其方の都合次第なれ共、身體健康の事についてはシモンズ氏へ呉々も依頼し、又今回同氏より懇々來書もあることなれば、兎も角もシモンズ氏の言を聞いたる上の事にいたしたく、又過日も申し遣わし候通り、一太郎の農學と申は、數學不得手より思ひ付き候事なれば、必ずしも穀物を作る農業のみに限らず、或は樹木菓木の事、牧畜の事等、其他何事に寄らず、餘り數學を要せずして、歸國の後、一家の生計を立るに便なるものあらば、農業外の事にも執業致されて可なり。シモンズ氏も何れ日本へ再渡の事ならん(此義に付ても拙者は内々考る所あり)。内外人雜居も容易に出來可申、或は氏

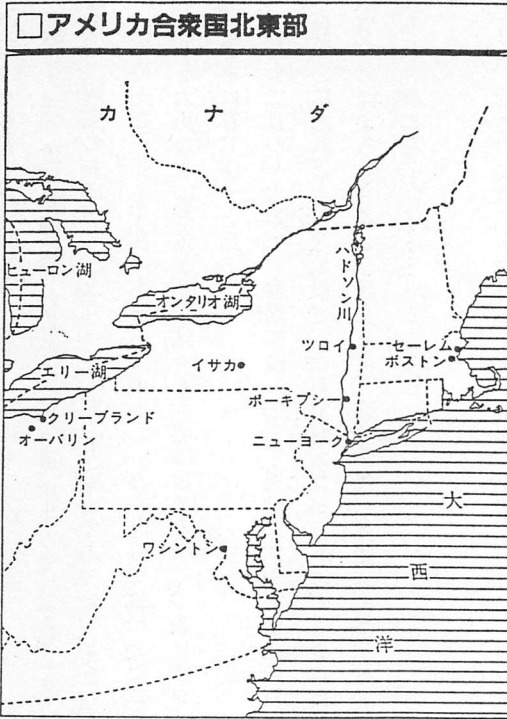


図2 桑原三二『福沢諭吉、留学した息子たちへの手紙』より引用

も日本に居て醫業又は著述等の餘暇に、然るべき地面を求めて、一太郎と一處に農業牧畜杯も随分面白き事ならん。東京負郭の地面は價甚だ廉なり。三光坂七千五百坪の所有地の代價千貳百四十圓なり。此邊の事も考置きて然るべき事なり。拙者の考には、一太郎は農業を以て立身の本と爲し、英文に巧を得て學校の教師杯を餘業にしたらば、或は前途の得策ならん歟と存じ候。……拙著の民情一新を差し送り候間、餘業に之を譯し、追々に新聞紙へも投書の後は、シモンズ氏へ謀り、之を米國に出版しては如何と存候。是れ第一は外國人をして日本國の事情を知らしめ、第二は日本學士思想を示し、又第三には日本人が書を著はずに日本國の看客のみを當にせずして外國人の所評に訴ふるとあれば、不文なる日本人も次第に學問を重んずるの心を生ずべきやに存ずればなり……」

この手紙を読むと、シモンズが再来日の計画のあることが知られる。又来日の際には、シモンズが医業、又は著述の余暇に一太郎と一緒に、農業、牧畜等を行つたらさぞ面白かるうなどと、一太郎のために、あれこれ思案する諭吉でもあったのである。自らの著書『民情一新』を一太郎に翻譯させ、シモンズを介して、アメリカで出版してはどうかとも書いている。常に発想が浮かんで止まない諭吉の姿が髣髴として浮かんでくる。

福沢は学業よりも、先づ健康を大切にし

た。二児への憂いは彼地で健康を害することであった。

「数年の後、汝等が歸國したる時には、半死半生の文人を見るよりも、筋骨逞しき不学者に逢はんこと、汝の父母の願ふ所、又國家の為に祈る所なり」とも記した諭吉であった。それだけに、シモンズが医師であったことは、諭吉にとつて、この上ない頼り甲斐のある、たのもしい存在として映つたに違いない。二月二十二日の一太郎宛の書簡には、「⁽⁶⁾藝よりも大切なるは身体なり、呉々も大切に致さるべく、過日はシモンズ氏、身体を検査して健康と認めたるよし、実に悦しき事に存じ候」とある。

五月十二日の一太郎宛の書簡には「……………過般來飲食不消化のみならず、少々熱を發し候よし、誠に心配に堪えず、最早全快とはあれども、渡米後さしたる故障もなかりしに、さきには咽喉の痛と云ひ、又今回は不(消)化発熱云々、一時の事なればよろしきこと候えども、或は全體の健康に何か申分の出來候譯にはあらずや。何卒シモンズ氏之鑑定診斷を頼みたき事に存じ候……………」とある。

さて、前述のように一太郎がシモンズと相談の上、オーバリンを去り、ニューヨーク州のポーキプシーに移り転校の準備をすることとなつたのは、明治十七年一月のことであつた。更に一太郎はシモンズの意見に従ひ、転校する学校はコーネル大学、捨次郎はツロイカマサチュウセツツ大学に決定した。明治十七年四月二十四日付の一太郎宛の書簡には⁽¹⁰⁾

「…………… Cornell 入校の義、シモンズ氏は正則課に就くべしとの説にて、其豫備に忙はしくなかんづく數學は少々困るよし。……………さて他人の子を世話いたすとなれば、一步にても上流に置く様にと心配いたし呉るゝも亦人情なり。既に今回も同氏より來狀、一太郎はいわゆる數學家には非ざれども、これを平均すれば決して拙なる者にあらず、ひと夏休暇中にも少しく用意すれば、大學校の正則課に入る事甚だ易し云々の趣申しまいり候事に候。シモンズ氏の説亦甚理ありと雖ども、其豫備の課業なる者が随分六ヶ敷して、残に數學杯に就き非常の精神を費し、為に病を

起すが如きありては以の外の次第なれば斷念いたし度、右兩様の利害は何分にもなたより差圖するを得ず。兎も角も目下入校の豫備は何れにしても、學問上に於て損毛には成らぬ其上に、自から英語英文の稽古にもなることなれば之を勤めて、當秋に至りいよいよ以て、正則に入るとも又は實地に就くとも、其時の事に致し、入るべき時は入り、入るべからざるときは實地に就かんのみ。拙者に於ては強ひてかよりに致せと命ずる積りはこれ無く候。」とある。

シモンズは一太郎をコーネル大学の正則課に入学させるのが願ひであった。論吉は必ずしもそれに固執しなかつたが、シモンズは勉強すれば入学可能としプライヴエートチャーチルを頼んで勉強させてはどうであろうかと論吉に手紙を書いて相談している。プライヴエートチャーチルとは、どうもヨングハンスらしいのであるが、判然としない。論吉はその願ひをうけ入れ、家庭教師をつけて一太郎に勉強させた。

一所懸命勉強したのであろう。その甲斐あつて、一太郎はニューヨーク州イサカ (Ithaca) のコーネル大学の入学試験に見事に合格して同大学に入学することができた。シモンズの苦勞が実つたのである。この報に接した論吉の喜びはいかばかりであつたらうか。十一月三日のシモンズ宛の論吉の書簡はその喜びを、次のように伝えている。

千八百八十四年十一月三日東京。

ドクトルシモンズ貴下に呈す。

九月二十八日の貴翰拜見致し候。一太郎入校の試験あいすみ候につき、わざわざコルネル大學へ御出張下され候由、御深切の段深く御禮申上候。さて同人義も入校試験登第したる由、是もかねて御添心を煩はしたる結果、小生に於て満足のみならず、貴下に向て多謝する所なり。

同人の住處は博士の宅にて、博士竝に細君も一方ならず、深切に致してくれ候よし、誠に安心致し悦び申候。學校付の醫士へも御話しくだされ、一太郎へは特別に運動致させ候様御約束くだされ候由、残る處なく御心つき下

され、小生の二子は米國に於て、一父を得たるに異ならず、小生竝に愚妻よりも厚く御禮申上候。……

一太郎が大學の正課に入るとは、小生が素より期する所に非ざりし。又これに入り病氣もなくして卒業すること「を」得ば、是亦望の外の事にして、小生とくに愚妻の悦は之に過るものある可らず。何卒四年の後に御禮を申すの日あらんことを、今より期して樂み居り候。

近日ボーストンにも御出、捨次郎を御尋問下さるべき由、貴下の大切な時を費し候段、恐縮に堪えず、幾重にも御禮申上候。……頓首

一太郎のコーネル大學入学合格の報に接して、諭吉は「小生の二子はアメリカに於て、一父を得たるに異ならず」と記して、シモンズに最大級の感謝の意を表している。余程嬉しかったのであろう。しかし一方では合格したものの、一太郎はうまくやってゆけるだろうか、健康は大丈夫だろうか、千々に心を砕く父親でもあった。一読して日本近世史上の偉人もまた人の親であったかと、賢くして痴なる人間像に限りない親しみを感ぜざるを得ない。

これらの資料は諭吉を知る材料として重要なものであるのは勿論であるが、何れの書簡も名文で、一つの文学としても特殊の地位を要求し得るものではなからうか。

三 浜口梧稜とシモンズ

ここでしばらく目を転じて、浜口梧稜とシモンズの関係について述べてみたい(図3)。

人名辞典によれば、「浜口梧稜は紀伊有田郡廣村の人、名は成則字は公興、通称は儀兵衛、梧稜はその号である。

文政三年六月十日の生れ。天保二年、十二歳のときに銚子に赴き、家業の醤油醸造を見習い、その間、蘭医三宅良齋の銚子に來るを幸い、良齋に師事す。また佐久間象山、勝海舟と交わり、廣村崇義団を興して海防に注意した。嘉永五年帰郷して青年子弟の養成に當ったが、安政元年海嘯襲來して被害すこぶる多かつたため、全力をあげて救済に當り、且つ大

防波堤を築造し、資を出して江戸の種痘所を再興せしめた。

明治元年正月藩の要路にあった津田出の推挙により勘定奉行に任じ、翌二年更に参政、和歌山藩權少参事、同四年、同權大参事として藩政改革に任じ、且つ家事を嗣子に譲って、梧稜を通称とした。

越えて七月、駅通正、駅通頭として朝官に任じ、次いで和歌山県大参事となったが、五年二月辞して野に下り、十三年和歌山県会成るや最初の議長に推され、また木國同友会を組織し自らその会長として政治思想の涵養に努め、十七年五月、海外視察のため渡米したが、翌十八年四月二十一日ニューヨークに客死した。」とある。

この梧稜が渡米した際、シモンズと交遊をもつのであるが、梧稜について医学史上忘れることのできない事蹟がある。
(一一)

安政五年春、蘭方医伊東玄朴らの努力によって神田お玉池に種痘館が作られたが、同館は創立後、一年を経ずして同年冬、神田の大火に際し全焼してしまった。玄朴らの落膽一方ならず、直ちに之を再興しようとしたが、蘭方医のなかには余力を有するもの甚だしく、社会もこれら新事業に対する理解も少く、再興は当分覚束なき状態であった。

三宅良斎と親しい間柄にあった梧稜は、江戸にありて、くわしくその事情を聞き、自ら進んで三百円を寄附して再興の援助とした。この美舉をみて他にも寄附する者も出て来て、万延元年よりやく再興することができたのである。



図 3 浜口梧稜

ここに集まる人は伊東玄朴、佐藤泰然、三宅良斎、林洞海といった面々で、何れも医界の泰斗及び新進気鋭のものたちであったから、この種痘館は、恰も西洋医学研究所の觀を呈していた。しかしここに集まり来る者の力を以ってしては研究費に事欠く有様であった。この事情を聞き梧稜は五〇〇円を寄附し、図書及び機械の購入にあてしめたのであつ

た。その二は青年医師関寛齋が長崎に留学し、ポンペについて医学を学ばんとした際梧稜は寛齋を援助し、長崎在中の一切の費用は勿論家族の生計に至るまで一切の面倒を見たことである。

これにより寛齋は西洋医学の新知識を得て、明治期に大きく活躍することができたのであるが、それらについてはここでは触れない。

さて家業を後嗣あとつぎに譲り一切の公職より退いて閑暇を得た梧稜は、かねてより念願の海外視察の旅を断行しようと決意した。ときに六十五歳であった。

この壯學を梧稜は、平生最も尊敬してやまない福沢諭吉にその計画を打ち明け、賛成を得て種々の援助を受けていた。明治十七年五月二十七日日付の村井保固宛の諭吉の書翰(二三)に、

「……………浜口翁は米國にて暑を過ごし、稍秋涼を待て渡英、之を根本として諸國を巡視、當冬は伊太里に居て、夫より印度海歸朝、大凡壹年間の漫遊、或は遊びどころが好ければ今少しく延びても苦しからず、又或は面白くなければ早く歸ると申、自由自在なり。依て案ずるに、米國滯留中は彼のドクトルシモンズ氏杯、日本の事情を知らんとするの要あれば、或は氏を東道の主人として米國の事情視察杯、好方便かとも存候……………」

明治十七年五月三十日梧稜はシチー・オブ・トウキョウ号にて横浜を出帆した。通弁には慶応義塾出身の高島小金治を連れていった。

このとき勝海舟は秘蔵の雜賀孫一の用いた槍の穂先ほこを贈り、その行を壯さかんならしめたという。梧稜は十月初旬、サンフランシスコに着き、十月二十二日同所を出発し、三十日にニューヨークに到着した。

十一月十四日日付の梧稜の書翰(二四)(諭吉あてのものと思われる)によれば、

「……………彼のドクトル・シモンズ氏は、紐育到着の日尋ね來り、其日ポーキプシーの宅へ歸り昨夜當地へ一泊せり

とて午前再び尋ねられ、又ボーキプシーへ歸り候。舊宅を片付け四五日内に當地へ移住すべしとの話に御座候。あい変らず強康談話愉快に候……」。

とある。この書翰によれば、シモンズは早速梧稜を尋ねたのである。談論風発、諭吉の想像通り東西の快男子は共にあい知る仲となつた。

年末までニューヨークに滞在し、いよいよヨーロッパの旅に出ようとして、ひたすら、その準備に忙殺されていた梧稜であつたが、たまたま不調を訴え病を感じするところとなつた。病は年新たまっても癒えず、ますます進行するばかりであつた。当時梧稜と行を共にした金子彌平は「濱口梧稜さんが病氣になられたのは、紐育へ着いてから間もない頃だつたと覺えて居ます。何でも始めの中は身體の具合が悪くて食事が進まない」と云ふので、前に横濱に来て居たシーモンと云う醫者の診察を受け、始終オードミールなどを喰べてゐました。濱口さん自身もそれが不治の病であるなどとは夢にも思はず、何時も元氣よく話してゐました……」と話している。^(一五)

この談話のように、シモンズは梧稜の病氣の診療にあたつたのである。さらに続けて彌平は云う。

「其の翌年になつて、濱口さんの病氣はだん／＼重くなつて來た模様でしたが、元氣は少しも衰へず、御自分は何でもない事のように樂觀してゐられました。然し病氣は少しも好い方へ向はないので、醫者のシーモン始め、其の他の人々も切に歸朝を勧めたのですが、濱口さんはそれには一寸も耳を藉さないで、何うせ死ぬなら此處で死んでも、日本へ歸つて死んでも同じ事だ。寧ろ歐羅巴へ行つて死んだ方が好いなどと云つて居られました。^(一六)」

ところが四月の初旬になると、腹部にガスがたまつて苦しく、ひどい衰弱も加わり、起居も思うようでなく、梧稜も死を覺悟したかのようであつた。四月二十一日、終に梧稜は鬼籍の人となつた。死因は腸癌であらうと思われる。

明治十八年六月四日付の一太郎宛の諭吉の書翰には、^(一七)

「……………ドクトル・シモンズ氏は貴様方へ対し特に深切に世話致し呉れ候よし。同氏も追／＼年老して、時として

壯年輩と説を同ふせざる事もこれ有るべく候えども、兎角柔順にしてなるべく逆はざる様致されたく存じ候。シモンズ氏が浜口翁病氣に付ても色々添心致しけれ、治療のことは姑く聞き、経済上にも多少の便利なりしは、実に謝するに餘あり。浜口の家族も甚だ感佩致し居り候。序の節宜敷伝言致されたく候……………」

とある。この文面よりして梧稜の病氣の診療は勿論、経済上の力にもなっていたことがうかがい知られる。「実に謝するに余あり」という言葉に諭吉はじめ家族の感謝の様子が目に見えるようである。

シモンズは義に厚く情にもろいセントルマンだったと思われる。諭吉はシモンズを大変愛していたが、この美擧などは諭吉がシモンズを非常に愛して止まなかった人柄の一端を示すものであろう。

梧稜の入院した病院はセント・ヴンセン・ホスピタルと推察されるが、さて後に残った者達は遺骸を「このまま横浜に送る方法はないものか」と医師に相談した。恐らくシモンズも関わったことと思われるが、その結果、防腐剤をほどこし、フロックコートを着せて寝棺に入れることにした。

遺骸は高島が護衛して横浜に着いた。

待ちわびた家族、知友らがこれを迎えて見るに、周倒なる医師の注意を以て、十分なる防腐剤を施してあったがため、フロックコートを着て仰臥せる遺骸は、数千里の異郷にて逝ける人の姿とは、とても見えなかったということである。遺骸は諭吉、海舟ら多くの人々の驚愕と悲嘆のなかを紀州に送られ、郷里の廣村に葬られた。

四 シモンズの来日とヨンハンス

さて一太郎はコーネル大学に就学し、学業に専念した。諭吉も安堵した。安堵した諭吉は内心ひそかに一太郎がコーネル大学の農学科を卒業してくれることを期待していた。

しかし、一太郎は二年に進むと農業実習に従事しなければならず、麦刈り、開墾、種蒔き、搾乳、羊毛の刈り取りな

ど、内外労働を強要され、それでも齒を食いしばって二年の実修には堪えたが、一旦農業の現実に幻滅してからは、どうしても農科に興味が持てず、一時は文学に向い^{むか}いような気配を示した。諭吉はこれを懇々とさとし、一太郎もこれに従いコーネル大学の正則課程を断念し、スペシャルコースを修業することに決心した。ところが、これも東の間で、一太郎はポークブシーに戻り、イーストマン・カレッジ（商業学校）に転校してしまった。明治十八年十月のことである。この間、すべてシモンズと相談の上の行動であることは言うまでもない。

しかし一太郎はこれも長続きはしなかった。明治十五年七月一太郎はイーストマン・カレッジを退き、文学に専念することに決意するに至った。このようなとき、シモンズは、一太郎の面倒など後事をドクトル・ヨングハンスに托して、日本に向って出発してしまふ。

明治十九年十二月二十三日付の事時新報^(二八)は、本月一日シモンズは桑港をオセヤニック号にて母堂を伴い出発、十二月二十日横浜港着、福沢諭吉はじめ、医友松山・隈川・伊東ら四十五名の者待ち迎え、シモンズ到着とともに、郵船会社支店の樓上に於て、シャンパンの杯をあげ、ドクトルの無事到着を祝し合つたと報じている。

さて、後事を托されたヨングハンスとは、^(二九)如何なる人物であるのか、少しく述べたい。

ここに登場するドクトル・ヨングハンスとは L.H. Jungbuns のことで、司馬遼太郎の大河小説『胡蝶の夢』のなかで、明治三年ごろ主人公伊之助にドイツ語の会話と読解を教えた人物として出てくるのがその人である。

たしかに明治のはじめ、ヨングハンスは築地に居留し医師を業としていた。この頃旧佐賀藩主鍋島直正（閑叟）の診療にあたったことがある。東京にいた直正公は屢々胃腸疾患に苦しみ、嘔吐や下痢に悩んでいた。多くの名医の診療を受けたが、病はいっこうに、はかばかしくない。そこで巷間、築地の名医として知られていたヨングハンスに診て貰うことになったのである。しかし、ヨングハンスの手当も空しく、直正公は衰弱するばかりで、終に鬼籍に入ることとなつてしまつた。明治四年一月十八日のことである。

直正公とのこのつながりが縁となって、ヨングハンスは伊万里県（今の佐賀県）の県立好生館病院の医学教師として赴任した。

一年あまり西洋の新手術の普及に尽力、任期満ちる頃契約の更新を請われたが、辞して横浜に旅立った。横浜に居留中、間もなく愛知県より招聘があり、明治六年五月よりお雇い外人教師として、名古屋門前町に新設された病院に勤務した。

ここで非凡な腕どころをみせ、その手術の斬新さは広く近隣にひびきわたり、病院の声価を大いに高めた。左脚の火傷患者に植皮術を施したり、屍体解剖を行い、病院の医局員や県下の開業医に公開した。

やがて明治六年十一月病院内に医学講習場（名古屋大学医学部の前身）が併設されると、ヨングハンスはここで医学の講義にも力を尽した。

医療と医学教育に専念すること三年、任期満ちたヨングハンスは再び横浜に戻った。

その後、どのような経歴をたどったのか明らかではない。それから数年、いつ日本を離れたのかは定かではないが、明治十六年頃、シモンズの住むポーキプシーに居を構えて、シモンズと親交を結んでいたのである。

シモンズは来日に際し、このヨングハンスに後事を托したのである。余談ではあるが、諭吉の養子となった福沢桃介も、留学に際しヨングハンスの世話を受けている。

桃介はヨングハンス宅に寄寓して明治二十年四月よりイーストマン・ビジネスカレッジに通うことになるのであるが、さて、後見者となったヨングハンスはシモンズにひきかえ、一太郎と捨次郎には評判はあまりよくなかったようである。

「ヨングハンス氏の羈束は不本意なり」（明治二十年七月十八日、一太郎宛書簡）^(二〇)「随分六ヶ敷事を申す」（二十年七月二十九日一太郎宛）^(二一)などと諭吉に訴えたようである。とりわけ一太郎はあれこれ不平をならべて訴えてきた。

シモンズが明治十九年の暮れ、ポーキプシーを離れ日本に旅立ってからは、諭吉は一段と一太郎のことが気がかりの種

となってきたようである。一太郎から送られてくる書簡に対し、きびしい真情に溢れた手紙を書き送っている。

既にシモンズは東京に在って築地二十三番に引移った頃のことである。明治二十年二月九日の一太郎宛の論吉の書簡に(三三)「貴様事、ドクトル・ヨングハンスの所に毎日行くも苦しからず、可成相丈け屢々する様致されたき旨、シモンズ氏は特に申居り候間、其積にて毎度尋問いたされたく、自ら得る所あるべし」とある。ヨングハンスの所へ学びに行くのを、一太郎は渋したのである。この頃、一太郎はアメリカの女性との結婚を考え、諭吉にその意向をたづねて来ているが、結局、一太郎の願いは叶えられず、学業のことや、あれやこれやで一太郎はいささかすさんでいたことが、ヨングハンスの忠告を招いたのである。自分の子供に対してもヨングハンスはきびしい教育法をとっていたようである。しかし八月二十六日には一太郎はポーキプシーを去り、当時ボストンのセイレムという町にいた捨次郎と同居することにしたことが、好転につながった。その後の十月にはナップの家に寄寓した。ここで一太郎が寄寓したナップについて触れなければならぬ。

五 ナップの来日とシモンズ

ここに登場するナップとは明治二十年アメリカのユニテリアン教会から、はじめて日本に派遣された宣教師アーサー・ナップ Arthur M. Knapp (図4) のことで、福沢にも少からぬ影響を与え、慶応義塾大学設置にあたって、大きく貢献した人物のことである。

明治十九年三月、帝国大学令が公布され、東京大学が帝国大学と改称され、四月には師範学校令、小学校令が公布されて日本の教育制度が大きく転換しようとしていた。

慶応義塾に大学部設置問題が提起したのもこの頃である。このとき慶応義塾の直面した問題は、一、教師はどこから、二、どんな学課を、三、資金はどうして、ということであった。この第一の問題を氷解してくれたのがナップである。



図4 アーサー・ナップ

たまたま留学中の一太郎はナップの家に寄寓する機会を得ていた。恐らくシモンズの配慮によるものであるかと私には思われる。

シモンズの妻がユニテリアンであったことについては既に述べたところであるが、このことからみてもシモンズはユニテリアンに少からぬ関心を示していたに違いなく知己も多かったかと想像される。

明治二十年十月十三日一太郎宛の諭吉の書簡には「今度ユニテリアンの僧にてナップと申人日本へ参候に付、其出発前、日本の言語風俗を取調に付、貴様が其家へ参るべきよし。是には面白き事なり………」とあ

り、十一月二十九日の書簡には「十一月一日ナップ宅より発したる英文の書狀昨夜相達し被見いたし候。先づ以てあいかわらず無事のよしめでたく存じ候………」とある。

十一月九日の書簡には、「過般はナップ氏方へ二週間ばかり滞留、日本の事情言語の事共話し、同家内君も至て深切なるよし………」とある。一太郎は二週間程、ナップの家に寄寓したのである。

シモンズがナップを諭吉に紹介し、やがてナップが義塾に来る手筈となり、日本の事情を説明するため一太郎の寄寓となったものと筆者は想像するのである。そうでなければ、どうして一太郎がナップを知り得たのであろうか。

一太郎宛の十二月七日の書簡には「ナップ氏も当月末には到来いたすべく相待ち居り候。ドクトル・シモンズも心待ち致し居り候様子に相見え候。………」とあり、十二月十九日の書簡には「ナップ氏は昨日入船の筈にて、横浜に外国人中待受の人あるゆえ、着の上世話致すべきをドクトルシモンズ氏と相談致し置き候えども、船は今に入港せず、或は今日ならんとかと存候………」とある。

これらの文面からは、シモンズとナップは知己の友であり、交遊の程がしのばれる。

ナツプは太平洋郵船ベルジック号で、明治二十年十一月三十日サンフランシスコを發したが途上海上不穩のため、横浜入港が遅れ、十二月二十一日朝到着した。

ナツプは福沢の大歓迎を受けたことは申すまでもない。シモンズはナツプの住居について種々奔走している。ナツプは三光坂の大鳥圭介の屋敷を借用したようである。

かくて「慶応義塾入り」したナツプは、慶応義塾での教育活動を通じてユニテリアンの布教の成功を信じていた。

ナツプは福沢の日本教育および文化面での役割を高く評価していたし、事実、またナツプは福沢より慶応義塾や時事新報を通じて布教と宣伝の自由を獲得したし、交殉社からも屢々講演の依頼を受けていたのである。

福沢も自らユニテリアンの主義宣伝をしきりに宣伝している。一時は慶応義塾とユニテリアンとの提携が世間に伝えられた程であった。福沢は慶応義塾が宗教的であるという評判の立つことを恐れながらも実際は少なからずユニテリアンに肩入れしている。その理由は恐らくユニテリアンの説教が福沢の文明論と極めてよく相似ていたからであらうと思われる。

そもそもユニテリアンは神と精霊とイエス・キリストの三位一体説を否定し、キリストを一個の偉人として認めるにすぎないのであって、福沢は「ミストル・ナツプの言に従へば、ユニテリアン教は必ずしも一派の宗教宗門に非ずして、洋語にてムーヴメントと稱し、邦言に訳すれば、運動、動勢、運機とも云うべきものなりと云う。其果して宗教なると然らざるとは余が関せざる所なれども、教の目的は人類の位を高尚にして智力の働きを自由にし、博愛を主とし、一個人一家族の關係に至るまでも、之を網羅して善に向はしむるにあり……」(「ユニテリアンに寄す」全集第二十卷^(二九))と述べている。

ナツプの仕事は順調に進み、「ミストル・ナツプは三月三日出發歸國、九月には再渡の積り、同氏の仕事は先づ上出来の方なり。本塾の学事改良に付、第一の要は教師のことにして、今回ナツプ氏歸國こそ幸なれ、一切同氏に托して雇入り

事に内談整え候。爾後慶応義塾の大学部は米國風にあいなるべく候……」と福沢桃介あての書簡^(三〇)(明治二十二年二月二十日)にみられるように、ナップは三月三日に日本を離れ論吉の依頼をうけて九月には外人教師を連れて再来日の予定であった。

ところが後述するが、不幸なことにドクトル・シモンズが八十歳に近き老母を残して、二月十九日に客死してしまつた。

そんな訳でナップがシモンズの母を伴つて帰国することとなり、ナップが老母を伴つて帰国の途については明治二十二年五月三日のことであつた。

帰国するや、論吉に依頼された教授の人選に奔走。ハーバード大学長エリオット Charles Eliot の推薦を得て、ナップは理財科主任教師ドロップス Garret Droppers、文学科主任教師リスカム William S. Liscomb、法律科主任教師ウィグモア John H. Wigmore の三教師を連れて、明治二十二年十月二十三日再び横浜に上陸、直ちに東京に向い、慶応義塾^(三十一)入りした。

以後この三教授が福沢を助けて大学部の創立とその繁栄に尽力したのであるが、そのみならず、この三教授のわが国社会科学研究史上に果たした役割も見逃してはならない。とくに理財科主任教授として九年という長い間にわたつて、慶応義塾の教育と日本の経済問題の研究に精力を傾けたドロップスの功績は大きく、「義塾史を離れてもわが国の初期経済学史上逸すべからざる人物」^(三二)と称されている。その上、ナップを代表とするこれらユニテリアンの人々が福沢論吉はじめ多くの人々に影響を与えたのは想像に難くない。余談ではあるが、ユニテリアンのわが国に及ぼした影響について一言記しておきたい。

このユニテリアン協会は安部磯雄のような社会主義者によつても支持され、福沢の死後三田を中心に発展し、自立、独立および自尊の宗派として日本の社会運動に大きな影響を与えた。

その後大正元年（一九一二）東京帝大出身の牧師鈴木文治は芝園橋の傍のユニテリアン協会本部に友愛会を結成し、後にこれが日本労働総同盟となったのである。このユニテリアン協会を率いる鈴木文治の積極的な活動を背景に、大正期の労働組合運動は育成され、慶応義塾の教授としては堀江歸一がこれに参加し、やがて、学生のなかからマルクス主義者、野坂参三、野呂栄太郎があらわれてくるのである。^(三三)

六 一 太郎の帰国とシモンズ

イーストマン・カレッジを断念し、好きな書物を次々に読破していた一太郎にも、時満ちて、いよいよ帰国のときが迫っていた。

明治二十一年一月十六日一太郎宛の論吉の書簡には次のような文面がみえる。^(三四)

「今年歸國に付ては、貴様には学校の卒業証書なし、実は小児の戯、なくても苦しからず、拙者は平気なれども、俗世界の俗情は又左様にも参らずと存じ、今日内々ドクトルシモンズに談じ、ポーキプシーのプライヴェートチャーチャーより證書を貰ふか、又は或る学校にて唯文学だけの證書を申受るか、如何様にか致したし。委細はドクトルにて含み込みおき候義につき、貴様も其心得にて、得らるべきものならば勉めて之を求むるの工風專一と存じ候、其節に當り、少々不愉快の義あるも忍んで之を受け候様いたされたく存じ候。

又右の義に付きてはシモンズ氏よりヨンハンス氏へ申越候事もあらん。然るときは貴様は兼てヨンハンス氏を悦ばざること付、同人の世話は面白からず杯云う意味もあらんなれども、ここは人用の忍ぶべき處なり節を屈しても何か證書を取り候様いたされたく候。」

とある。

また同年の一月二十三日の一太郎宛書簡には、^(三五)

「貴様が本國歸國に付ては、セルチフヒケーションを取る様ドクトルシモンズ氏も注意致し呉れ、ドクトルはジーゲンフース氏へ、ナップ氏はホイトニー氏へ申送る積りなり、貴様も其心組にて都合宜しく致されたし。今を去る二十年今の鉄道局長井上勝氏が英國より帰りたる時、氏が鉄道の事を学び得たる所ある其次第に付きプライベートの学者のセルチフヒケーションありて、現に拙者が之を翻譯しつかわしたることあり、日本の世界には随分大切なことなり必ず忘れざる様致されたく候」とある。

日本の社会では証書の大切なことを説き、何でもいいから恰好の証書をもらってくる様淳々と一太郎に言っけさせる諭吉の親心が切々と伝わってくる。シモンズも何かと懸命に助力したのであるが、一太郎本人はこれを肯んぜず、不同意として、結局何の証書を持たずに帰国することとなった。

この辺の事情を次の書簡が物語っている。(明治二十一年三月二十三日一太郎あて諭吉書簡)^(三六)

「さて貴様が歸國に付ては、何か学業上の證書にてもあらば都合宜しからんと云に申しつかわし候處、右は不同意のよし、拙者に於てもさまで熱心する譯けにもあらず、如何様にも苦しからず候間、貴様の存念通りに致され度候、又此事は素と拙者が心付き候よりドクトルシモンズへも語り候義にて、ドクトルより話の出でしにあらず、何も六ヶ敷考えるに及ばざる事なり。併しジーゲンフース並びにホイトニーより貴様に与ふる書面もあらば、特に之を辞することもなかるべし……」

しかし一太郎は結局、何の証書も持たずに帰国することになったのである。

一方、捨次郎は首尾よくマサチューセツ工科大学を卒業した。これと時を同じうして一太郎もアメリカを引き払い、兄弟相携えて帰国の途についた。二人は六月六日ニューヨークを発し、ロンドンに渡り、これより大陸に渡り、諸所を廻ってマルセイユから船に乗り、途中格別のこともなく、十一月四日横浜に到着、十二時十五分の汽車で待ちかねている家

族のもとへ帰った。

諭吉は待ちに待った二子の帰朝に欣喜して次のような七言絶句を作(三七)った。

雛燕すずめ歸巢面目眞 雛燕巢に歸りて面目眞なり

家山況又少風塵 家山況や又風塵の少なるとや

歡迎共飲皆新旧 歡に迎えて共に飲むは皆親旧

和氣滿堂冬似春 和氣堂に滿ちて冬も春に似たり

一別天涯別六閏春 一たび天涯に別れてより六たび春を閏す

相看恰是夢耶真 相看れば恰も是れ夢か真か

九郎不識阿兄面 九郎は識らず阿兄の面

却問佳賓何處人 却って問う佳賓は何處の人ぞ

(九郎とは第九子、大四郎のことで、彼は二人の出発した翌月誕生した)。

諭吉の喜びが手にとるようであるが、すでに三田山上に寓居を構えていたシモンズもまた、二人を喜び迎えた一人であつた。

文 献

- (一) 荒井保男「米医 D・B・シモンズ」『日本医史学雑誌』第三十三卷第二号、一二一～一二七頁、昭和六十二年。
- (二) 富田正文「二子と養子の洋行留学」『三田評論』通卷八六号、四八～五〇頁、慶応義塾、昭和六十一年一月。
- (三) 福沢諭吉全集、第十七卷(書翰集一)、五六〇頁、岩波書店、昭和三十七年。
- (四) (三)と同書、五八三頁。

- (五) (三) と同書、五九二～五九四頁。
- (六) 桑原三二『福沢諭吉、留学した息子たちへの手紙』六五頁、はまの出版、一九八九年。
- (七) (三) と同書、六三〇～六三二頁。
- (八) (三) と同書、六四二～六四四頁。
- (九) (三) と同書、六六五～六六七頁。
- (一〇) (三) と同書、六五九～六六一頁。
- (一一) (三) と同書、六九八～七〇〇頁。
- (一二) 杉村廣太郎『浜口悟稜』一六〇～一七三頁、(私家版) 大正九年。
- (一三) (三) と同書、六六八～六六九頁。
- (一四) (一一) と同書、三八一～三八五頁。
- (一五) (一一) と同書、三八八～三八九頁。
- (一六) (一一) と同書、三八九～三九〇頁。
- (一七) (三) と同書、七四三～七四四頁。
- (一八) 『事時新報』明治十九年十二月二十三日発行。
- (一九) 加藤詔士「ドクトル・ヨングハンス」『三田評論』通巻第八六四号、三八～五一頁、慶応義塾、昭和六十年十一月。
- (二〇) 福沢諭吉全集、第十八卷(書翰集二)、一三三頁、岩波書店、昭和三十七年。
- (二一) (二〇) と同書、一四一頁。
- (二二) (二〇) と同書、八三頁。
- (二三) (一) と同書、一二三頁。
- (二四) (二〇) と同書、一七二頁。
- (二五) (二〇) と同書、一七六頁。
- (二六) (二〇) と同書、一七六頁。
- (二七) (二〇) と同書、一七九頁。
- (二八) (二〇) と同書、一八五頁。

- (三〇) 福沢諭吉全集、第二十卷、三六七～三六九頁、岩波書店、昭和三十七年。
- (三一) (二〇)と同書、二七九頁。
- (三二) 西川俊作「G・ドロッホーヌズの履歴書と業績」『三田商学研究』二十六卷一〇号、一〇八頁、慶応義塾、昭和六十年十一月。
- (三三) (三一)と同書、一〇八頁。
- (三四) 飯田鼎『福沢諭吉』二二四～二二三頁、中央公論社、昭和五十九年。
- (三五) (一〇)と同書、一九三～一九四頁。
- (三六) (一〇)と同書、二〇〇頁。
- (三七) (一〇)と同書、二一四頁。
- (三八) (一〇)と同書、二七八頁。

(横浜市鶴見区)

D. B. Simmons, an American doctor (II)

—Dr. Simmons in the U.S.A. as seen from the letters of Yukiichi Fukuzawa—

by Yasuo ARAI

I have already reported on the relationship between Yukiichi Fukuzawa and the achievements of Dr. Simmons at Juzen Hospital in Yokohama, but his life in the U.S. after his return was totally unknown.

While I was reading The Complete Works of Yukiichi Fukuzawa, I happened to find the name Simmons in Fukuzawa's letter to his two sons, Ichitaro and Sutejiro, who were studying in the U.S. in Volumes 17 and 18 which are a collection of his letters.

I, then, decided to read all of his letters addressed to his sons, to Simmons, to L.H. Jungfuns,

and to Momosuke Fukuzawa. After reading all these letters, I found some facts about Simmons in the U.S.. Here I report on what I found out from the letters with some additions of my own considerations.

The summary is as follows.

1. After returning to the U.S., Simmons lived at a small town called Po'keepsie which was located about two hours by train from New York City.
2. While Fukuzawa's two sons, Ichitaro and Sutejiro were studying in the U.S., Simmons acted as guardian for them and took care of them in many ways. He especially helped Ichitaro enter the University of Cornell.
3. A Japanese businessman, Goryo Hamaguchi, had visited the U.S. on a business mission in the 17th year of Meiji (1884), but unfortunately he died of illness in New York City. During his illness Simmons helped him not only medically but also financially.
4. Arther M. Knapp was the first missionary sent to Japan from the Uniterian Church in the U.S. in the 20th year of Meiji (1887), and he contributed a great deal for the establishment of Keio University. It is mentioned that Simmons had much to do with Knapp's coming to Japan.